

国語表現

date: 年 月 日

学習内容：意図すること

注文の多い料理店 宮沢賢治

学籍番号

氏名

注文の多い料理店

宮沢賢治

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、びかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいておりました。「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わなから、早くタンタアーンと、やつて見たいもんだな。」

「鹿の黄いろな横つ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だらうねえ。くるくるまわって、それからどたつと倒れるだらうねえ。」

それはだいぶ山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごつて、どこかへ行ってしまつたくらい山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いで、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起して、しばらく吠つて、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ。」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、ちよつとかえしてみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔を悪くして、じつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻らうとおもう。」

「さあ、ぼくもちよつと寒くはなつたし腹は空いてきたし戻らうとおもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあと戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾も買って帰ればいい。」

「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰らうじゃないか。」

ところがどうも困つたことは、どつちへ行けば戻れるのか、いっつこう見当がつかなくなつていました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さつきから横つ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困つたなあ。何かたべたいなあ。」

「喰べたいもんだなあ。」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には、

RESTAURANT  
西洋料理店  
WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちよつといい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入らうじゃないか。」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだらう。」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか。」

「はいろうじやないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。

そして硝子の開き戸がたつて、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもお入りください。決してご遠慮はありませぬ。」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やつぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんざしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただで馳走するんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませぬというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなつていました。

「ことに肥つたお方や若いお方は、大歓迎いたします。」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあつてゐるのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから。」

「ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。」

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだらう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあげようとして、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそはご承知ください。」

「なかなかはやつてるんだ。こんな山の中で。」

「それあそつた。見たまえ、東京の大きな料理屋だつて大通りにはすくないだらう。」

二人は云いながら、その扉をあげました。するとその裏側には、

「注文はすいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういうことだ。」

「そうだらう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかつて、その下には長い柄のついたブラシが置いてあつたのです。

扉には赤い字で、

「お客さまが、ここで髪をきちんとして、それからその泥を落してください。」と書いてありました。

「これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびつたんだよ。」

「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずつて、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室の中に入つてきました。

二人はびっくりして、互によりそつて、扉をがたんと開けて、次の室へはいつて行きました。早く何か暖いものでもたべて、元氣をつけて置かないと、もう途方もないことになつてしまつと、二人とも思つたのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持つてものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来てるんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによつとぼえらいひとなんだ。奥に来てゐるのは。」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでべたべたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖つたものは、みんなここに置いてください。」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあつたのです。

「ははあ、何かの料理に電氣をつかうと見えるね。金庫のものはあぶない。ことに尖つたものはあぶないと斯う云うんだらう。」

「そうだらう。して見ると勘定は帰りにここで払うのだから。」

「どうもそうらしい。」

「そうだ。きつと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫の中に入れて、ばちんと錠をかけました。

国語表現

date : 年 月 日

学習内容：意図すること

学籍番号

注文の多い料理店 宮沢賢治

氏名

「すこし行きますとまた扉があつて、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてありました。」

「壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗つてくさい。」

「みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。」

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ほかには、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

「二人は壺のクリームを、顔に塗つて手に塗つてそれから靴下をぬいで足に塗りました。それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。」

「それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」

「と書いてあつて、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。」

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだつた。この主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下じや仕方ないね。」

「するとすぐその前に次の戸がありました。」

「料理はもうすぐできます。」

「十五分とお待たせはいたしません。」

「すぐたべられます。」

「早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」

「そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。」

「二人はその香水を、頭へばちやばち振りかけました。」

「ところがその香水は、どうも酢のような匂がするのです。」

「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだらう。」

「「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」

「二人は扉をあけて中にはいりました。」

「扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。」

「いろいろな注文が多くてうさかつたでしょう。お気の毒でした。」

「沢山の注文というのは、向うがこつちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にとべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とどういうことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」

「「がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。」

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」

「「がたがたがたがた、たふるえだして、もうものが言えませんでした。」

「「逃げ……。」

「「がたがたがたがた、戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。」

「奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、いや、わざわざご苦労です。」

「大へん結構にできました。」

「さあさあおなかにおはいりください。」

「と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよるきよる二つの青い眼玉がこつちをのぞいています。」

「「うわあ。」

「「がたがたがたがた。」

「「うわあ。」

「「がたがたがたがた。」

「ふたりは泣き出しました。」

「すると戸の中では、こそこそこんなことを云つています。」

「「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうさかつたでしょう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ。」

「「どつちでもないよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ。」

「「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいつて来なかつたら、それはぼくらの責任だぜ。」

「「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらつしやい。いらつしやい。いらつしやい。お皿も洗つてありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたど、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけですよ。はい、はい、いらつしやい。」

「「へい、いらつしやい、いらつしやい。それともサラダはお嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらつしやい。」

「二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合わせ、ぶるぶるふるふる、声もなく泣きました。」

「「わん、わん、ぐわあ。」という声が出て、あの白熊のような犬が二匹、扉をつきやぶつて室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはうとうとなつてしばらく室の中をぐるぐる廻っていました。」

「「また一声」

「「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。」

「その扉の向うのまっくらやみのなかで、」

「「にやあお、くわあ、ごろごろ。」という声が出て、それからがさがさ鳴りました。」

「室はけむりのように消え、二人は寒さにふるふるふるえて、草の中に立つていました。」

「見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あつちの枝にぶらさがつたり、こつちの根もとにちらばつたりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はこんこんと鳴りました。」

「犬がふうとうなつて戻ってきました。」

「そしてうしろからは、」

「「旦那あ、旦那あ。」と叫ぶものがあります。」

「二人は俄かに元気がついて」

「「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」と叫びました。」

◎考えてみよう。  
筆者は何を表現しようとしたのか？  
童話の体裁ではありませんが、最後の終わり方などから考察してみよう。